

森のちやれんがニュース

2019 冬

Newsletter vol.18



第15回企画テーマ展

『エゾシカ』を開催（2019年10月12日～12月15日）

北海道の野生動物としておなじみのエゾシカ。現在の北海道における生き物の話題のうち、もっとも大きな問題にもなっています。今回の展示では、このエゾシカについて、動物としての姿から、過去の人との関わり、近年の個体数の増加とそれによる影響、そしてその対策まで、多様な視点から広く紹介して、北海道の野生動物と人との関係、その将来について考える機会となることを目指しました。

また、多くの協力機関と連携し、エゾシカまつりなどの様々なイベントを開催したり、おいしいエゾシカ料理を

提供する飲食店をめぐるスタンプラリーを行ったりなど、エゾシカを楽しく学べる機会を設けました。

なじみはあるけれど、よくわからない。そんなエゾシカを詳しく知り、驚くお客様が多く見受けられました。

まさに、「百聞は一見にしかず」
（研究職員 鈴木明世）



来場者もびっくりしたエゾシカを捕獲する罠



CONTENTS

- ② 収蔵資料紹介
野幌丘陵から新たに発見した貝化石
- ③ 総合展示の資料紹介・第4テーマ
リンリン♪ 黒電話
- ④ 研究活動紹介
サハリンに残る「樺太」を探して
トピックス
⑥ つくって鳴らそうシカ笛♪ 開催!!
忠類ナウマン象化石骨発見50周年記念
事業を終えて
アイヌ民族文化研究センターにより
特別展「アイヌ語地名と北海道」関連パネル展示
⑦ 「アイヌ語地名研究者・山田秀三とたどる
村の建物ゆかりの地名」を開催しました
- ⑧ 活動ダイアリー
2019年9月～11月の記録

収蔵資料紹介

野幌丘陵から新たに発見した貝化石

圓谷 昂 史

研究部自然研究グループ 研究職員

今回紹介する収蔵資料は、2015年から実施した当館の研究プロジェクト「石狩低地帯北部地域を中心とした新生代の古環境復元」の地質調査で、当館が建つ野幌丘陵から新たに発見した貝化石についてです。

化石というと、最近では恐竜をイメージされる方が多いのではないのでしょうか。テレビや映画などでもよく取り上げられており、化石界のヒーロー的存在です。そんな彼らと比べると、貝化石は地味な存在と言えます。しかし貝類は、恐竜が繁栄するはるか昔、約5億年前から地球上に生息しています。現在、世界中には、約10万種以上が知られており、超深海（6,000m以深）から高い山の上まで、長い年月の中で、多様な環境に進出し適応してきました。そして、硬い石灰質の殻をもつものが多いことから、他の動物と比べて化石として残りやすく、量・種類共にたくさん発見されるため、当時の古環境を知る重要な手がかりになります。

今回、新たに発見した貝化石は、合計83種類になりました。詳しく分析した結果、3つの特徴が明らかになりま

した。1つ目は、すべて海に棲む種類であるということです。2つ目は、岩場または砂地に棲むものなど、生息する場所や環境が異なる種類が、混在しているということです。貝化石が発見された地層の特徴を詳しく解析した研究によると、貝化石が堆積した当時は、海面が上昇しているとき（海進期）であり、この地域は日本海と太平洋をつなぐ海峡であったことがわかっています（加藤ほか 2018^{*1}）。貝化石の多くは、海峡の強い流れに流されて周囲から集まってできたものと考えられます。3つ目の特徴は、絶滅した種類が11種類含まれているということです（写真1）。

これまで野幌丘陵からは、6種類の絶滅した貝化石が発見されてきました。しかし、今回発見された11種類の内、9種類は初めて見つかった種類でした。貝類に限らず、絶滅した生物の化石は、その地層ができた年代を知る手がかりになります。今回は、貝化石とプランクトンなどの微化石の分析、軽石の年代測定を行いました。年代を決定づける証拠が不足していたため、正確な年代はわかりませんでした。しかし、状況証拠をつなぎ合わせると、前期更

新世の終わりのころ（約120万～78万年）の可能性があると推測することができました（圓谷ほか 2018^{*2}）。

野幌丘陵は、約70年前から多くの研究者による調査が行われており、貝化石をはじめ、カイギュウやクジラ、ゾウなどの多くの化石が発見されています。これらの化石は、北海道の過去の様子を教えてくれる貴重な資料です。今回の貝化石は、そこに新たな知を与えてくれるものとなりました。今後も調査を継続し、より詳しい北海道の過去の様子を皆様にお届けしたいと考えています。なお、これらの貝化石の一部は、2020年4月10日（金）まで、当館の総合展示室第1テーマで展示しています。是非ご覧ください。

*1 加瀬善洋・林圭一・圓谷昂史・添田雄二・栗原憲一・畠誠・廣瀬亘・大津直（2018）, 北海道北広島市西の里で認められたサンドリッジ堆積物の堆積相・古流向とその意義, 北海道博物館研究紀要, 3, 133-141

*2 圓谷昂史・添田雄二・栗原憲一・加瀬善洋・鈴木明彦・能條歩・畠誠・林圭一・廣瀬亘・大津直（2018）, 北海道北広島市西の里で認められた第四系の地質年代, 北海道博物館研究紀要, 3, 143-161

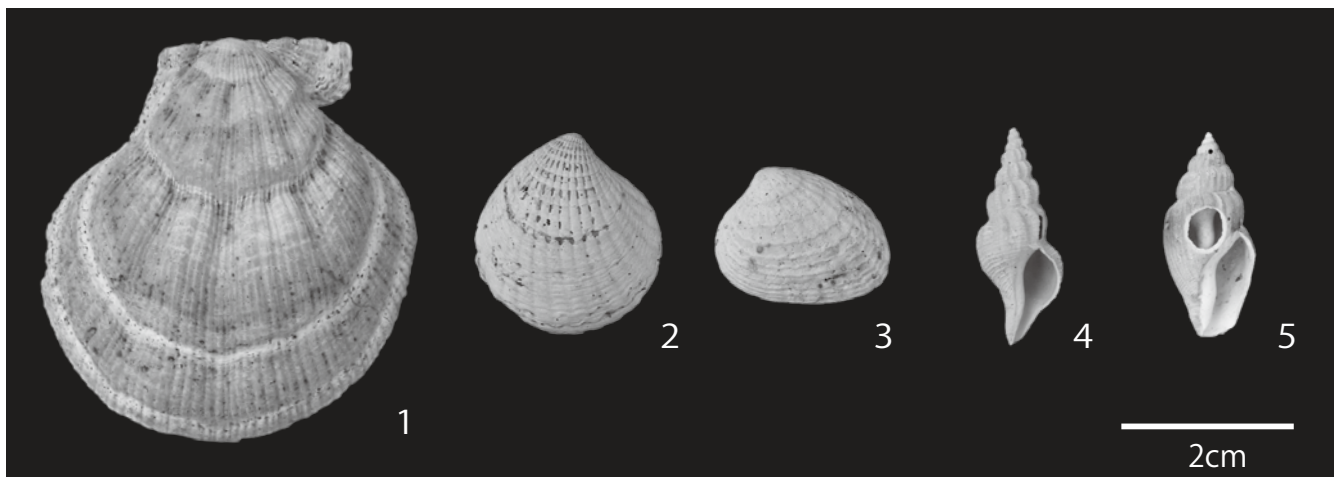


写真1 野幌丘陵から新たに発見した貝化石（絶滅種）

1. コシバニシキガイ *Chlamys cosibensis* (184760), 2. ミヨウガダニマルフミガイ *Cyclocardia myogadaniensis* (184769), 3. オンマフミガイ *Megacardita ommaensis* (184770), 4. サワネイソニナ *Searlesia japonica* (×2.0) (184739), 5. カガニヨリマンジ *Propebella kagana* (184746)

総合展示の資料紹介・第4テーマ

リンリン♪ 黒電話

会 田 理 人

研究部生活文化研究グループ 学芸主査

総合展示2階の第4テーマは、北海道の現代を紹介するコーナーとして、20世紀の100年を展示しています。戦争と高度経済成長という二つのできごとをはさんで、この100年の間に私たちのくらしや社会のしくみ、身の回りの道具類が大きく様変わりしました。「くらしの絶滅危惧種」と名付けたコーナーから、そんな「消えつつある」、あるいはすっかり「形を変えてしまった」道具類の一つとして、「黒電話」を紹介します。

日本で、自分（発信者）と、電話で話したい相手（受信者）とをつなぐ「電話交換サービス」が始まったのは、1890（明治23）年12月16日のこと。東京と横浜で始まりました。当時は、「電話交換手」と呼ばれる職員の手で回線をつないでいました。

北海道では、1899（明治32）年7月26日、札幌電話交換局が開局します。8月1日には小樽で、少し遅れて10月10日には函館で交換局が開局しました。実際に電話交換サービスが開始されるのは、翌年、1900年のことです（札幌は3



4号自動式卓上電話機

月1日から、小樽は4月1日から、函館は6月1日から）。道内の交換サービスが始まった時の電話加入件数は、札幌141件、小樽257件、函館320件。そして、このときから「電話交換手」という新しい職業が北海道でも誕生しました（『北海道の電信電話史』）。

こうして、20世紀を通して北海道の電話網が拡大し、電話が普及していきます。

さて、第4テーマで公開している黒電話は2点あります。一つは、1950（昭和25）年に誕生した4号自動式卓上電話機。国内の電話機の普及に大きく貢献しました。もう一つは、その後継機、600型自動式卓上電話機。1962（昭和37）



600型自動式卓上電話機

年に誕生しました。600型は、4号自動式と較べて性能が大幅に向上するとともに、丈夫で軽く、価格も安いのが特徴。通話機能と経済性のうえで、優れた黒電話でした。この2台はともに、昭和の戦後復興期から高度経済成長期を支えた電話機です。

黒電話で電話をかける時には、受話器を持ち上げて、本体中央の「ダイヤル」を回すのですが、その時、0から9までの数字が電気信号に変換されました。

ダイヤルを回す音は「ジーコ、ジーコ」。電話がかかってくると、黒電話のベルが「ジリリリリリン」と鳴って教えてくれます。慌てて（乱暴に）受話器を戻すと、「ガチャン！」と音が響いてきました。黒電話が姿を消し、携帯電話・スマートフォンが普及した現在、「ダイヤルを回す」という表現とともに、これらの擬音語も、「絶滅危惧種」と言える存在かもしれません。

展示をしている600型電話機は、どなたでも受話器を持ち、ダイヤルを回すことができます。また、祝日の開館日に合わせた来館者サービスとして、不定期ではありますが、総合展示での「ハンズオン」を開催しています。ご家族で、ご友人同士で、昭和の時代には日常だった黒電話の感触を（特に、ダイヤルを回して、元の位置に戻ってくるまでの「もどかしさ」を）、お楽しみください。



ハンズオン リンリン♪ 黒電話

祝日開館日の「ハンズオン」として、ダイヤルを回す感触、ベルの音を体験することができます。

研究活動紹介

サハリンに残る「樺太」を探して

鈴木 明世

研究部博物館研究グループ 研究職員



研究職員 鈴木 明世

1994年、東京都出身。早稲田大学大学院で修士を取得し、2018年より当館研究職員。専門は建築史。写真は、サハリンにおける建造物遺構の調査の様子。

サハリンの南部（北緯50度線以南）がかつて日本の領土（樺太）であったことをご存知の方は多いでしょう。では、その当時の建造物が現在でも多く残っていることは知っていますか？

北海道博物館とサハリン州郷土博物館による研究交流事業の一環で、2019年10月14日（月）～28日（月）にかけて、表溪太学芸員とサハリンに調査に行ってきました。表学芸員は自然系調査を行うため、私とは別行動でしたので、ここでは私が行ったサハリンでの建造物調査について少しだけ紹介します〔図1〕。なお、本記事では冒頭の日本統治の期間を樺太時代と記述します。



図1 主な調査地 （Google My Mapsにて作成し追記）

実は、サハリンにおける樺太時代の建造物調査は、開拓記念館時代の建築史職員や北海道大学の研究者がすでに行っております。しかし、それもかれこれ20年近く前の話ですので、その後の変遷を確認する必要がありました。そこで、今回の調査では、当時発見された建造物の再訪を中心に、日本では未報告の建造物の発見、そしてそれらの正確な位置情報を獲得することを目指し、サハリンにはどれだけ樺太時代の建造物が残っているか、そしてそれらが現在どのような状態になっているかを探ってきました。調査の際には、上記の調査で記録されたものや、サハリンの研究者が発見した樺太時代の（と思われる）建造物を案内してもらい、調査を進めていきました。

結果として、この調査では廃墟や遺構を含め、約80箇所もの建造物および建造物群を訪問することができまし

た。その移動の経路は、位置情報の記録機器（GPS ロガー）を用いて常に記録し、建造物を訪問した際は、スマートフォンの地図アプリを用い、その場で位置情報を残すようにしました〔図2〕。特に移動経路の記録は重要で、それによって、訪問した建造物だけでなく、調査地の中で通っていない場所も誰にでもわかるようになります。今後、私以外の誰かが調査をすることがあれば、私が行っていない場所を調査していただくことで、樺太時代の建造物を新たに発見できる可能性があります。科学技術の発展はすごいですね。

さて、樺太時代は、日露戦争後から第二次世界大戦後までの50年にも満たない短い期間でしたが、大正期の製紙パルプ産業や昭和期の炭鉱業の隆盛の影響もあり、広くサハリン南部全体に市街地が形成されていきました。そうした樺太時代の市街地の多くが、道路などの街区を残したまま広がり、建物が建ち替わって、現在のサハリンの街並みをつくっています。実際に街を歩いていると、樺太時代もこのような風景だったのかなあと、当時の面影を感じることができました。

では、サハリンの街の中にはどのような建造物が残っているのでしょうか。サハリンの中心都市であるユジノサハリンスク（旧豊原）には、樺太時代の建造物が多く残っています。特に



図2 調査の行程を記録し、地図上に表示する。（Google My Mapsにて作成）



図3 サハリン州郷土博物館（旧樺太庁博物館）



図4 旧王子製紙泊居工場 現在は発電所として一部利用されている



図5 旧白浦で発見された刻印入りの日本製のレンガ

樺太庁や日本軍関係施設は、サハリン（ロシア）にとっての重要な施設として再利用され、内装は変わっていましたが、外観はほとんど当時の状態で残っている様子が多く見られました〔図3〕。

また、樺太各地で建てられた製紙工場も一際目立っていました。当時、複数の企業が樺太に進出し、その工場が市街地発展の基礎になった地域も多くありました。現在では、そのほとんどが廃墟になってしまっていたが、大規模な建造物を利用して、発電所などに利用されている事例もありました〔図4〕。市街地を見下ろすように大きくそびえ立つその姿は、製紙パルプ産業の隆盛を物語っているようでした。

この他にも、レンガ造やコンクリート造の建造物は、使われなくなっているものも多く、「日本製のコンクリートは丈夫で品質が良いため、ソビエト時代に建てられたコンクリート造の建物の方が早く壊れてしまう」といった話も聞きました。また、各地で様々な企業の刻印が入ったレンガを発見し、樺太は建設産業が注目した土地であった可能性を感じました〔図5〕。

住宅といえば、軍事関係の将校官舎などの一般住宅に比べ上等な建物がまともに残り、改築しながら現在でも住まわれている地域がありました〔図6〕。それに対して、木造の一般住宅は過去の調査時点からも失われたものが多く、数少ない残っている住宅も、屋根が板金で覆われ、外壁がロシア風の板張りに改築され、樺太時代と判別



図6 樺太時代から現在まで使われている住宅（旧大谷）



図7 空き家の屋根破損部から見た桁葎（柿葎）屋根（旧豊原）



図8 旧泊居神社跡 ロシア語と日本語併記の説明板が設置されている

が難しい状況になっておりました。しかし、注意深く観察すると、当時の北海道の一般住宅に多く使われていた桁葎（柿葎）屋根が見えたり、日本の伝統的な屋根構造（和小屋）をしていたりと、日本ならではの技術が用いられている部分が破損部分などから発見でき、樺太時代と推定できました〔図7〕。

そして、なんと樺太時代の神社の遺構も各地に残っています。ブズモリエ（旧白浦）とトマリ（旧泊居）では、鳥居も残っており、鳥居に向かう階段の新設や、遺構の説明板の設置など、樺太時代の遺構が観光目的で活用されている大変面白い事例を見ることができました〔図8〕。



変わりながら使われ続けるもの、廃

墟となっているもの、失われてしまったもの、建築史研究を行っている私にとっては、その全てがサハリンの歴史の変遷をたどる手がかりになります。今回の調査で、約80箇所もの建造物と街並みを見て、現在のサハリンの中に、たしかに「樺太」が息づいていることを感じました。そして、当時の建造物を保存し活用しようとする動きがあることも知りました。その波が収まる前に、日本でしかできない資料調査を行い、調査できなかった北西部も訪ね、それらの成果をサハリンに還元していきたいと考えています。

私にとってサハリン研究はまだ始まったばかりです。さらなる研究の発展をご期待ください。

トピックス

つくって鳴らそうシカ笛♪ 開催!!

10、11月のはっけんイベントは「シカ笛づくり」です。シカ笛ってシカの形をした笛のこと？ いえいえ…シカを捕える時おびき寄せるために使った笛で、シカの鳴き声そっくりの音がします。

当館では、この秋企画テーマ展「エゾシカ」が開催され、その関連として、はっけん広場では「シカ笛づくり」をおこないました。

アイヌ民族のシカ笛を参考にし、現在のくらしで手に入りやすいパネル



ボード、ストロー、ラップを用いて作りました。ボードに穴をあけてストローを差し込み、ラップで覆います。ストローで息を吹き込むとラップが振動し音が出ます。ボードには好きな絵を描いてもらい、オリジナルのシカ笛完成です。

完成したシカ笛を吹くと、ピーッという高い音がします。勇んで吹いても音の出ないことがあり、両端を引っ張るよう教えると音が出て嬉しそうな表

情にかかります。どうしたら良い音が出るかいろいろ試し、上手に音が出るようになったら周りの人に得意そうに聞かせていました。

最近何かと話題のエゾシカ。「エゾシカ」展でシカのことを知り、はっけん広場で「シカ笛」をつくることで、エゾシカを身近に感じてもらう機会になったようです。

(解説員 麻生典子)



忠類ナウマン象化石骨発見50周年記念事業を終えて

忠類ナウマン象記念館担当 鎌田 浩

1969年ナウマン象化石骨発見から50年となる今年、北海道博物館と共催で、全ての化石骨が初めて里帰りする特別展(10月5日～11月4日)、象の足跡を求める発掘調査(10月29日～11月2日)、学術的価値と歴史を再認識する講演、札幌市円山動物園とのかぼちゃプロジェクトなどの記念事業を実施しました。

この事業では、私たちと足寄動物化石博物館、北広島市エコミュージアムセンター、円山動物園の職域を超える協力と繋がりが一つのチームのようになって展開しました。特に、発掘では足跡の可能性のある2つのくぼみを発見し、十勝毎日新聞と北海道新聞による連日の速報によって、改めて忠類ナウマン象の魅力と学術的価値と感動が多くの方に伝わりました。

発見当時私は10才、発掘現場の鮮明な記憶、骨格復元の感動、日本中に知れ渡った「ナウマン＝忠類村」、ナウマンと共に歩み、見つめ、親近感を持ち、シンボルとして誇りに思い、そして職として数度関わり、この事業を最高の喜びとし来春定年退職を迎えま

す。ナウマン象と一緒に素晴らしい「ONE TEAM」を体験できたことは、生涯忘れられません。そして今回の事業を機に、今後忠類ナウマン象のさらなる魅力が再発見されると思っています。



アイヌ民族文化研究センターだより

特別展「アイヌ語地名と北海道」 関連パネル展示 「アイヌ語地名研究者・山田秀三とたどる 村の建物ゆかりの地名」 を開催しました

北海道博物館第5回特別展「アイヌ語地名と北海道」(7月6日(土)～9月23日(月・祝))にあわせて、特別展期間中に北海道開拓の村で、パネル展示「アイヌ語地名研究者・山田秀三とたどる 村の建物ゆかりの地名」を開催しました。

* * * * *

北海道博物館と同じ野幌森林公園内にある「北海道開拓の村」には、明治から昭和初期にかけて建設された北海道各地の52の建物が、移築復元・再現されています。それらのなかから15棟を選び、建物があつた場所の地名や、持ち主が住んでいた場所の地名など、ゆかりの地名を取り上げたパネルを、建物の入り口に設置しました。

パネルの内容は、当館が所蔵するアイヌ語地名研究の第一人者である山田秀三氏(1899～1992)の地名調査資料(山田氏による現地調査の写真や自筆の地図など)を中心に、山田氏の著作などをもとに作成しました。

* * * * *

あわせて、パネルを置いてある建物や紹介している地名を一覧にしたリー



フレットも作成し、開拓の村内で配布しました。

開拓の村から伺ったところによれば、お客様からの声として「建物の所在地について考えるきっかけになった」などの感想が寄せられたとのことでした。また、開拓の村のボランティアの方々からも「改めて各建物を回る機会になった」という声をいただきました。

リーフレットは、パネル展示の終了後も開拓の村および北海道博物館にて配布しています(部数がなくなり次第終了)。

* * * * *

アイヌ民族も北海道の近現代を歩み、社会を築いてきたという当たり前のことを考えれば、明治から昭和の北海道が舞台である「北海道開拓の村」にも、アイヌ文化やアイヌ史と関わる様々な側面があるはずで。そうしたアイヌ文化やアイヌ史のすがたを、展示などの方法で伝え、考えていくことができれば、と思っています。

このパネル展は、その最初の試みでもありました。今回いただいたご感想やご意見なども参考に、これからも開拓の村と協力して、様々な展示の企画や取り組みを進めていければと考えています。

(アイヌ民族文化研究センター
遠藤志保、小川正人)



活動ダイアリー

2019年9月～11月の記録

※■は展示活動、■は教育普及活動、■はその他の博物館活動です。

9月1日(日)

■講演会 連続講座「アイヌ語地名と北海道」
「アイヌ語研究からみた「アイヌ語地名」その2」を開催。担当：切替英雄氏。

9月8日(日)

■講演会 連続講座「アイヌ語地名と北海道」
「アイヌ語研究からみた「アイヌ語地名」その3」を開催。担当：中川裕氏。

9月14日(土)

■子どもワークショップ「アンモナイトを解剖しよう」を開催。担当：圓谷昂史、栗原憲一氏。

9月15日(日)

■講演会 連続講座「アイヌ語地名と北海道」
「古地図と歩く」を開催。担当：和田哲氏。

9月16日(月・祝)

■学芸員による特別展展示解説セミナー「地名の「ル」、そしてわがルベシベ」を開催。担当：大谷洋一。

■屋上スカイビューを特別開放。

9月18日(水)

■館内定例研究報告会を開催。発表者：鈴木あすみ・小川正人。

9月19日(木)

■令和元年度北海道立総合博物館協議会を開催。

9月23日(月・祝)

■学芸員による特別展展示解説セミナー「山田秀三のアイヌ語地名研究」を開催。担当：小川正人。

9月29日(日)

■ちゃれんがワークショップ「大人のための「アイヌの楽器 まったく初めての体験」」を開催。担当：甲地利恵。

10月5日(土)

■はっけんイベント「つくって鳴らそうシカ笛」を開催(～11月24日の土日祝振)。



10月6日(日)

■子どもワークショップ「ガリ版でいんさつ屋さん！」を開催。担当：会田理人・鈴木明世。

10月12日(土)

■第15回企画テーマ展「エゾシカ」が開幕。
(～12月15日(日))



■総合展示室クロズアップ展示①、②を展示入替。①『蝦夷風俗十二ヶ月屏風』を読む(2)



②新選組の元幹部隊士 永倉新八



10月14日(月・祝)

■第15回企画テーマ展「エゾシカ」関連ミュージアムトーク「開拓使とエゾシカ」を開催。担当：山田伸一。

■ロシア・サハリン州に職員を派遣。(～10月28日)

10月16日(水)

■館内定例研究報告会を開催。発表者：櫻井万里子・鈴木琢也。

10月19日(土)

■第15回企画テーマ展「エゾシカ」関連講演会[シンポジウム]「いま、あらためてエゾシカ問題を考える」を開催。担当：横山真弓氏、宇野裕之氏、伊吾田宏正氏。

10月22日(火・祝)

■第15回企画テーマ展「エゾシカ」関連ミュージアムトーク「飛び出し注意看板」を開催。担当：鈴木あすみ。

10月30日(水)

■館内定例研究報告会を開催。発表者：大坂拓・鈴木明世。

11月3日(日・祝)

■特別イベント「ミュージアムコンサート アイヌ音楽ライブ」を開催。出演：MAREWREW(マレウレウ)。



■文化の日講演会「植物を食べるシカ、シカに食べられる植物」を開催。担当：高槻成紀氏。

11月4日(火・祝)

■第15回企画テーマ展「エゾシカ」関連ミュージアムトーク「食べて減らす? 美味しいエゾシカの話」を開催。担当：水島未記。

11月9日(土)

■第15回企画テーマ展「エゾシカ」関連自然観察会「紅葉の森で動物を探そう!」を開催。担当：表溪太・水島未記・鈴木あすみ、自然ふれあい交流館スタッフ。

11月10日(日)

■アイヌ語講座「アイヌ語 はじめの一步」を開催。担当：遠藤志保。

11月16日(土)

■第15回企画テーマ展「エゾシカ」関連特別イベント「エゾシカまつり」を開催。

11月17日(日)

■ちゃれんがワークショップ「稲わらで縄をつくって、巨大人間あやとりに挑戦!」を開催。担当：池田貴夫・舟山直治。

11月19日(火)

■令和元年度北海道立総合博物館協議会アイヌ民族文化研究センター専門部会を開催。

11月23日(土・祝)

■ハンズオン「エゾシカにさわってみよう」を開催。担当：水島未記・表溪太。

■第15回企画テーマ展「エゾシカ」関連ミュージアムトーク「馬と鹿のお話」を開催。担当：表溪太。



11月24日(日)

■第15回企画テーマ展「エゾシカ」関連講演会「開拓使の頃のエゾシカと人」を開催。担当：山田伸一。

11月27日(水)

■館内定例研究報告会を開催。発表者：尾曲香織・甲地利恵・奥田統己。

11月30日(土)

■ちゃれんがワークショップ「鳥のつばさの標本をつくろう!」を開催。担当：鈴木あすみ・表溪太。

人事異動

新任(11月1日付)〈学芸部道民サービスグループ兼研究部博物館研究グループ学芸員〉：澁谷美月

来館者数

○2019年9月～11月

総合展示室 28,228人 特別展示室 19,471人 はっけん広場 7,543人

○累計(2015年4月～2019年11月)

総合展示室 506,498人 特別展示室 379,366人 はっけん広場 119,006人

森のちゃれんがニュース 第18号

発行日：2019年12月31日

編集・発行：北海道博物館

〒004-0006 札幌市厚別区厚別町小野幌53-2

Tel. (011) 898-0456 Fax. (011) 898-2657

ウェブサイト <http://www.hm.pref.hokkaido.lg.jp>

©Hokkaido Museum, 2019